

# 廃校と空き家を活用した都市農村交流プログラムの展開

— 下関市菊川町「貴和の里につどう会」の事例 —

# DEVELOPMENT OF THE URBAN-RURAL EXCHANGE PROGRAM BY REUSING CLOSED SCHOOL AND VACANT HOUSE

— Case study on “Kiwanosatoni-tsudoukai” in Kikugawa town Shimonoseki city —

山本幸子 — \* 1 中園真人 — \* 2

Sachiko YAMAMOTO — \* 1 Mahito NAKAZONO — \* 2

キーワード:

都市農村交流活動, 地域資源, 廃校, 空き家, 住民組織

Keywords:

Urban-rural exchange project, Regional resource, Closed school, Vacant house, Inhabitant organization

Inhabitant organization in Kikugawa-cho Yamaguchi Prefecture rented a closed school for the activities base, and repaired a vacant house for the base facilities, and inhabitants are grappling with the urban rural interchange activities. The paper aims at verifying the effect on maintenance of the facilities and the validity of the renovation plan. By the establishment of the organization, the interchange events such as “the annual event” that makes an agriculture experience like as rice planting, reaping, cake making that is held through a year, “the summer vacation cramming school” that does a field activities, handicraft and so on for the child, the lecture held irregularly, are being done and staying events are on the increase, too.

## 1. 序論

少子化により都市・農村にかかわらず小中学校の統廃合が進められており、統廃合後の学校施設活用が課題となっている。学校は地域コミュニティの中心的施設としての役割を果たしてきた経緯があり、地域住民からも存置あるいは活用が要望される場合も多い。特に過疎農村地域では、地域の学校の消失により今後新規の若年世代の居住が見込めず、過疎・高齢化が加速度的に進行することが危惧される。そのような中、統廃合を契機に住民主体による廃校を活用した都市農村交流プログラムが少数ではあるが見受けられるようになり<sup>注1)</sup>、既存ストックの有効活用により集落活性化を目指す取組みとして位置付けられる。

廃校を活用した都市農村交流プログラムには、宿泊を伴う行事と日帰り行事がある。学校施設は教室・体育館・グラウンドといった屋内外に広い空間を有し、多人数規模のプログラムに適しているものの、給食室が付帯していない場合は、食事提供のための調理場の新設が必要で、宿泊を伴う場合は入浴設備の新設や寝室の改修整備も必要となる。ところが住民主体の場合は改修費確保が困難なケースも多いため、施設改修を行うことができず、プログラムの多様な展開が妨げられている可能性もある<sup>注2)</sup>。

このような改修費確保の課題に対し、下関市菊川町の住民組織「貴和の里につどう会」(以下、つどう会と略称)は、廃校を市から無償で借り上げ改修を行わず既存のまま活動拠点とする一方、住民参加による空き家改修工事によりコストを低減しつつ都市農村交流施設としての機能を補完し、日帰り1泊2日程度の宿泊を伴うプログラムが提供されており、住民主体による都市農村交流施設整備手法の

先進例として注目される。

関連既往研究には、住民主体による集落活性化活動に関し、住民と支援団体等の協働による地域運営活動の先進事例研究<sup>2,3)</sup>や、都市農村交流を通じた地域運営のパートナーシップ形成過程を考察した研究<sup>4)</sup>があり、活動の展開に対して地域住民や外部人材が果たす役割が明らかにされている。また都市農村交流に関しては、プログラムの創出手法を検討した実証的研究<sup>5)</sup>や、中山間市町村における取り組み状況と施設タイプを明らかにした研究<sup>6)</sup>、住民団体等による民家や廃校を活用した地域活性化活動の成果報告<sup>7-10)</sup>等があり、プログラムの開発方法や民家・廃校を転用した施設整備の内容及び運用状況が明らかにされている。

一方廃校と空き家を併用した施設整備手法を取り上げた研究は少なく、かつ施設整備前後の期間に亘り、併用手法が都市農村交流プログラムの展開に与えた影響を検討した研究はない。そこで本論では、つどう会による空き家改修の報告<sup>11)</sup>に引続き、廃校と空き家を組み合わせた施設整備手法の効果について、施設の使われ方調査をもとに各々の空間機能を整理した上で、本施設整備手法がプログラムの多様化と展開に与えた効果を検証することを目的とする。

## 2. 調査概要

### 2.1 調査対象地の概要

対象集落は下関市菊川町南東部に位置する轡井・道市・樺の木の3集落で(図1)、谷あいには棚田が広がる中山間農業集落である。つどう会は豊東小学校轡井分校の休校(2002年3月)に伴い、3集落住民有志により集落活性化を目的に2007年6月に設立され、都市

<sup>1)</sup> 筑波大学システム情報系 助教・博士(工学)  
(〒305-8573 茨城県つくば市天王台1-1-1)

<sup>2)</sup> 山口大学大学院理工学研究科 教授・工博

<sup>1)</sup> Assistant Prof., Faculty of Engineering, Information and Systems, Univ. of Tsukuba, Dr. Eng.

<sup>2)</sup> Prof., Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng.

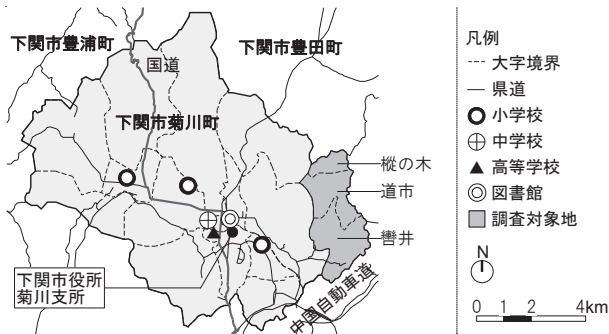


図1 集落位置図

表1 都市農村交流プログラム開催年表

年間行事		地域こども塾		交流行事		
年	月	内容	年月	内容	年月	内容
07	11	芋堀り		08	8	総会・元分校教師講演会
08	4	筍堀り	08	7	6	宿開所式・懇親会(宿泊)
	6	田植え・芋植え		8	8	総会・映画鑑賞会
	10	稲刈り	8	8	9	下関市立大学ゼミ合宿(宿泊)
	11	芋堀り・登山		10	10	ふるさと活性化講演会主催
	12	餅つき		11	11	海士町へ視察
09	4	筍堀り	09	7	12	津和野町おがの村へ視察
	6	田植え・芋植え		8	6	総会・映画鑑賞会
	10	稲刈り		8	12	日韓交流(宿泊)
	11	芋堀り		2	2	国交省事業報告会参加
	12	餅つき		5	5	放課後こども教室1
10	4	筍堀り	10	8	6	県職員研修菜種摘み
	6	田植え・芋植え		8	8	総会・講演会・懇親会
	10	芋堀り		8	仁	多都奥出雲町へ視察
	12	餅つき		10	10	宿泊体験モニター1
11	4	筍堀り	11	7	11	放課後こども教室2
	6	田植え・芋植え		8	11	宿泊体験モニター2
	10	稲刈り		11	11	下関市立大学教授講演会
	12	餅つき		12	12	韓国トグリ村訪問
				2	2	宿泊体験モニター3
						阿武町民宿視察

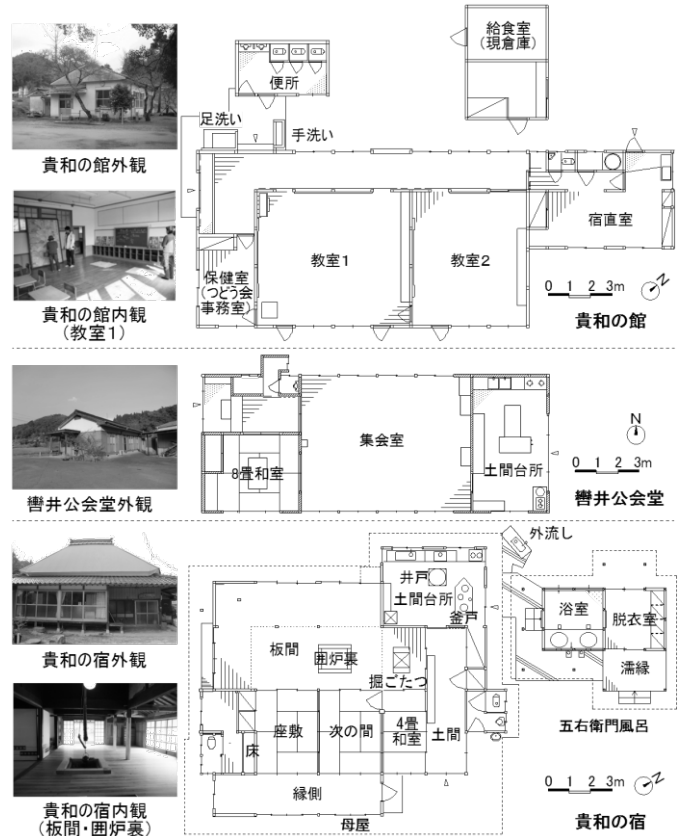


図2 都市農村交流施設平面図と外観・内観写真

農村交流活動に取り組んでいる。

## 2.2 調査方法

住民組織の設立経緯と施設整備プロセスは、著者らが組織設立当初から活動に参加する中で随時実測調査と関連資料収集を行った。都市農村交流プログラム調査は、つどう会設立から5年間(2007~2011年)に開催された全プログラムを対象に、年間を通して継続調査した。2007・2008年は観察記録と写真撮影を行い、空き家改修後の2009年以降は、観察記録・写真撮影に加え施設の使われ方調査(10分間隔で行為の場所と内容を記録)を実施した。

## 3. 都市農村交流プログラムと施設整備プロセス

つどう会設立後5年間に開催されたプログラムを表1に示す。1年間を通して企画されたプログラムを「年間行事」、夏休み期間中に小学生を対象に開催するプログラムを「地域こども塾」、その他の行事を「交流行事」として区分する。年間行事は、筍堀り・田植え・芋植え・稲刈り・芋堀り・餅つきの農作業体験が毎年行われる。地域こども塾は地元会員らが講師となり自然学習・野外活動・工作・調理等を体験する行事で、年2~6回開催されている。その他の行事としては講演会・視察・職員研修・放課後こども教室・懇談会等に加え国際交流・宿泊体験等が行われている。

都市農村交流プログラムの開催場所を図2, 3に示す。つどう会の拠点施設は響井分校を活用した「貴和の館」と空き家を改修した「貴和の宿」で、響井自治会所有の公会堂も適宜利用されている。響井分校は休校後、地域住民のサークル活動の場として利用されてきたが、つどう会発足と同時に活動拠点候補となり、借受け要請活

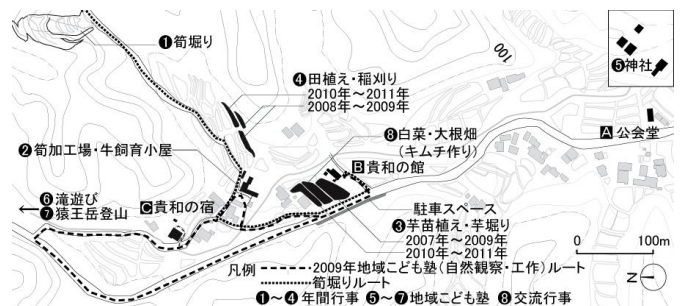


図3 都市農村交流プログラム開催場所

動が実を結び2008年12月に無償貸与が決定し、「貴和の館」としてつどう会により管理されている。敷地は東西に広く敷地東側に校舎、西側にグラウンドと遊具が配置されており、前面道路沿いに駐車スペースがある。建物は木造平屋建てで、2教室・保健室・宿直室と別棟の便所・給食室(現倉庫)から構成される小規模分校である。改修費用調達の問題から当面は現状のまま使用されている。

公会堂は1981年建設の響井自治会所有の木造平屋建てで、集会室と8畳和室・土間台所を有し、台所には集落の祭事等に対応可能な調理設備・器具・食器類が揃えられている。

「貴和の宿」は館から約300m北に位置する、地域の典型的な農家住宅で、土間台所には井戸と釜戸が残されていた。改修工事は2008年9月に開始され、北面居室は多人数利用を考慮し23畳の囲炉裏を設けた板間に改修されたが、南面居室・縁側・玄関土間は原状のままで、南面居室が宿泊時の寝室に充てられる。台所設備改修と風呂増築は予算の制約上2期工事とされ、2010年9月に助成金を

年/月	2007・2008	2009	2010	2011
拠点	2007.06会設立	03貴和の宿竣工	09流し台・風呂設置	01台所ガス設置
館 公会堂	屋食を公会堂で準備し館に運ぶ 野外活動中心 稲刈り(08-09) 田植え・芋苗植え(08-09) 稲刈り(08-09) 芋掘り(07-08-09)			
館・宿 公会堂	屋食を公会堂・宿で準備、宿で屋食 野外活動中心 稲刈り(10) 田植え・芋苗植え(10) 芋掘り(09-10)			
館・宿	屋食準備が 公会堂から 宿へ変化、 屋食会場が 館から宿へ 変化	試験的に宿 の台所のみ で屋食準備	屋食準備が 公会堂と宿 に変化	宿で屋食準備・屋食 野外活動中心 稲刈り・ 田植え・ 芋苗植え 稲刈り
館	1日のプログラムをすべて宿で行う、館の内部・外部を一体的に活用 餅つき(08.09.10.11)			

凡例 館: 貴和の館 (宿: 貴和の宿) (公: 豊井公会堂) (野: 野外)  
 ●: 主な活動場所 ○: その他活動場所 →: 参加者動線 ---: スタッフ動線  
 注) 図中数字は行事実施年度を示す。

図4 年間行事の内容と利用施設



写真1 年間行事(2008年芋掘り)

利用して整備された。2011年1月には台所ガス設備工事が行われた。農作業体験や野外活動等が開催される農地等は、館から徒歩移動可能な範囲が選定されており、移動時間短縮と交流活動の領域が館から集落に拡大する効果が意図されている。

#### 4. 年間行事の内容と使われ方

以下では3区分したプログラム別に、施設整備前後のプログラムの変化及び使われ方調査をもとにした3施設の空間機能を整理する。年間行事の内容と利用施設の変化を図4に示す。利用施設は館・公会堂・宿の組み合わせにより、以下の4種類に区分される。

##### 4.1 館と公会堂を利用する場合(2007~2009年)

行事開始当初の利用方法で、館グラウンドに集合し徒歩で田畑・竹林に移動後農作業体験を行い、館で昼食をとったあと解散する。施設としては館のみを利用するケースで、グラウンドと教室が100人規模の参加者が一堂に集う場として利用される。館には調理設備がないため公会堂の台所で調理し車で館まで運ぶが、調理場と食事場が分離しているため準備と片づけに手間がかかり、食事は軽食の提供にとどまっている。

芋掘り(2008年11月)の事例を写真1に示す。参加者(94人:スタッフを含む、以下同)は館グラウンドに集合した後、隣接する畑へ移動し芋の収穫を体験する。この間調理スタッフは公会堂で味噌汁・おにぎりを調理し車で館まで運び、昼食時には校庭にテントを張り準備した昼食を配布する一方、ガスを持ち込み釜で芋を蒸す。グラウンドにはシートが敷かれ、家族連れや子どもの参加者が座って食事をする姿や、年配の参加者がベンチに掛け昼食をとる姿が見られた。

##### 4.2 館・宿・公会堂を利用する場合(2009~2010年)

設立から1年後の2008年8月、宿泊体験に取り組むため農家住宅

表2 年間行事の調理場所と調理内容

使用拠点	宿		宿・公会堂			宿		
年月日	2009.6.7	2009.10.4	2009.11.1	2010.6.6	2010.10.31	2011.4.24	2011.6.5	
イベント名	田植え 芋苗植え	稲刈り	芋掘り	稲刈り	田植え・ 芋苗植え	芋掘り	稲刈り	田植え・ 芋苗植え
昼食メニュー	おにぎり 炒物 酢の物	おにぎり 味噌汁	おにぎり・ 豚汁 ふかし芋	おにぎり 豚汁 煮物	おにぎり 豚汁 炒め物	おにぎり 豚汁 ふかし芋	おにぎり 豚汁	おにぎり 味噌汁 そば・煮物
公	ガス炊飯器 ガスコンロ(汁物)		●味噌汁	●煮物	●煮物	●煮物		
宿	釜戸1(米炊き)	●炊飯	●ふかし芋	●味噌汁	●味噌汁	●味噌汁	●味噌汁	●味噌汁
備考	釜戸2(その他)	●炒物	●味噌汁	●味噌汁	●味噌汁	●味噌汁	●味噌汁	●味噌汁
	大釜(汁物)	●味噌汁	■持込・芋	■持込・芋	■持込・芋	■持込・芋	■持込・芋	■持込・芋
	ガスコンロ1(汁物)	■味噌汁	ガスボンベ 持参で炊飯、汁 物を作る。	ガスボンベ 持参で芋を ふかす。豚汁 は公会堂から運 搬。	簡易コンロ を持参し、大釜で作 った汁物を鍋に 移し、温めな おす。			
	ガスコンロ2(その他)							

凡例 公: 豊井公会堂 宿: 貴和の宿 ●: 設置されている調理器具で調理を行う ■: 調理器具を持ち込み調理を行う

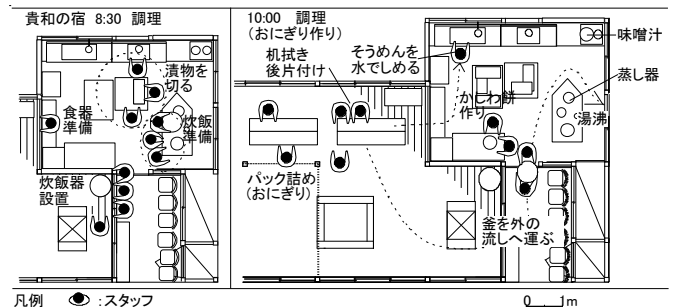


図5 年間行事(2011年田植え・芋苗植え)



写真2 年間行事(2009年餅つき)

を活用した施設整備が計画され、2009年3月に竣工後、昼食会場が宿に移った。2009年以降の年間行事の調理場所と調理内容を表2に示す。2009年の田植え・芋苗植付けと稲刈りでは宿の台所のみで昼食を準備し昼食をとる試みがなされた。しかし、ガス設備が未整備なため宿台所で全ての調理を行うことは難しく、2009年11月以降の芋掘りから稲刈り、田植え・芋苗植え、2010年の芋掘りまでは、公会堂でおにぎり・野菜の下茹で、宿の釜戸と大釜で汁物等を調理する手順に変化した。公会堂から宿へ昼食を運ぶ手間は以前と変わらないが、食事会場が宿に変化し片づけがスムーズに行えるようになると共に、参加者が館から宿へ徒歩で移動することで、集落の環境や暮らしを体感する機会の提供が可能となった。

##### 4.3 館と宿を利用する場合(2011年)

2011年1月の宿台所ガス設備設置に伴い、調理場が宿に移り、館と宿を利用する方式へ移行した。大型ガスコンロに加え釜戸や大釜を併用した調理方法により昼食のメニューが増え、地元の米・味噌・野菜等の食材を基本とした農家料理が提供されると共に、調理から片付けまでの一連の作業が1ヶ所で可能となり、スタッフの移動負担が軽減されている。

田植え・芋苗植付け(2011年6月)の事例を図5に示す。参加者(46人)は館に集合後畑へ移動し、芋の収穫作業後、徒歩で水田に移動し田植え作業を体験する。作業後は水路で手足を洗い昼食会場



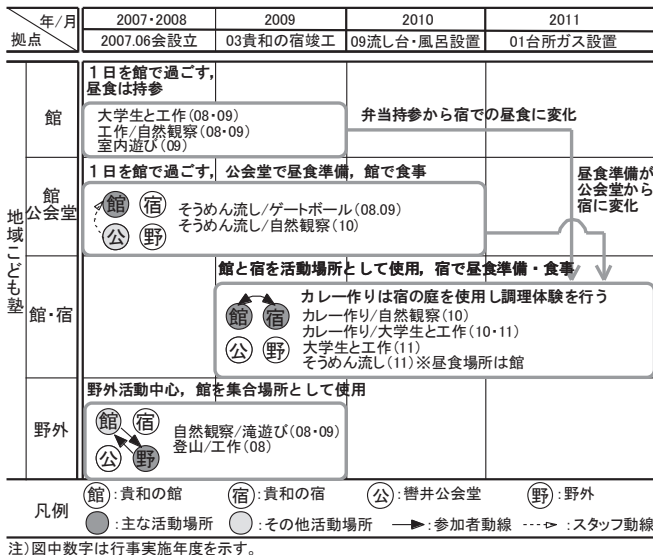


図6 地域こども塾の内容と利用施設

の宿へ移動する。その間調理スタッフは宿で昼食準備を行う。ガス炊飯器と釜戸で炊飯しおにぎりを作り、並行して釜戸で柏餅を蒸す。またガスコンロで素麺を茹で、他のコンロで味噌汁を作る。参加者は板間や座敷等に自由に座って昼食をとり、昼食後も縁側や庭で寛ぐ場面が見られた。

#### 4.4 館を利用する場合(2008~2011年)

餅つき時の利用方法である。1年で参加者が最も多い行事で、グラウンドが餅つきと餅を丸める場、教室がパック詰め場となり、旧分校が100人規模の作業・加工体験場として機能している。昼食にはつきたての餅と豚汁・自家製漬物等が振舞われ、参加者はグラウンドで食事をとった後、解散する。

2009年12月の事例を写真2に示す。グラウンド北側に蒸籠3台と臼2台及び「だいごら」を設置し、テントを張り餅つき会場とし、子どもと一般参加者(99人)を中心に餅をつき、校舎玄関前テントに運びスタッフが餅を丸める。餅を教室に運びパック詰めし受付で販売する。校舎の前には大釜が設置され、昼食用の豚汁が調理されており、グラウンドと校舎全体が利用されている。

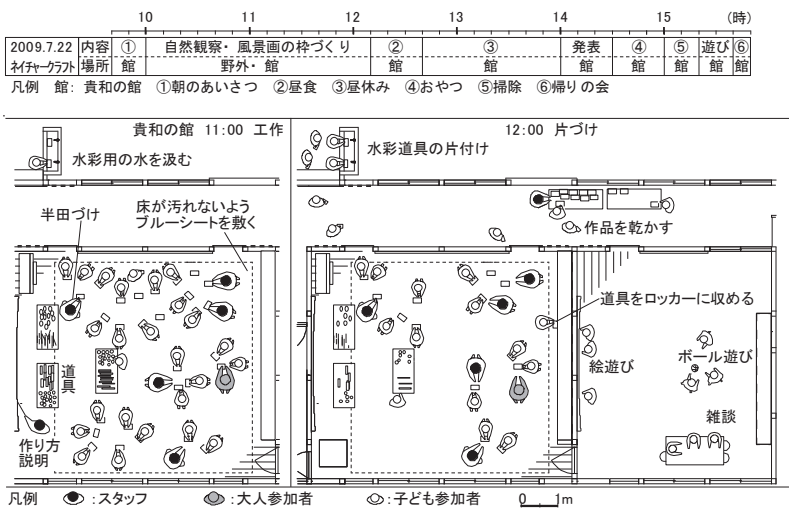


図7 地域こども塾(2009年自然観察・工作)

以上、年間行事は50~100人規模の都市からの参加者があり、駐車スペースのある館を集合場所、野外を農作業体験場、館を加工場(餅つき)とし、屋内外ともに広い空間を有す旧分校が有効に機能している。宿整備後は昼食準備・会場が宿に移行し、農家料理の提供だけでなく、参加者が館から集落内へ移動する機会を誘発し、整備前に意図していたおりの交流活動領域の拡大が実現している。

#### 5. 地域こども塾の内容と使われ方

地域こども塾の内容と利用施設の変化を図6に示す。利用施設の組み合わせは、以下の3種類に区分される。

##### 5.1 館を利用する場合(2008~2009年)

集合から解散までの1日を館で過ごし、昼食は各自持参する場合の利用方法である。1教室で約40人が作業することが可能で、水場が備えられているため、工作时には学校としての空間・設備機能が活かされた使われ方である。

自然観察・工作(2009年7月)の事例を図7に示す。この日は32名の子どもと高校生2名、大学教員1名がスタッフとして参加している。グラウンドに集合後、森林インストラクターと集落内を徒歩移動し、ポイント毎に野草・農作物・野鳥・昆虫等の説明を受ける。館に戻ると観察した風景の絵を作成する。昼食は教室または外の木陰など自由に場所を選び持参した弁当を食べ、昼休みにはグラウンドで竹製玩具やブランコで遊ぶ。昼休みが終わると教室で全員作品発表を行い、おやつの後掃除を行い教室で帰りの会が行われ解散する。

##### 5.2 館・公会堂を利用する場合(2008~2010年)

素麺流し時の利用方法である。地域資源である竹を活用した竹細工と町特産の素麺流しを組み合わせた行事が毎年行われている。

開催事例(2009年8月)を写真3に示す。全員(68人)集合するとスタッフが大竹を割き素麺を流す樋を作り、子ども達は金槌とノミで節を取除く作業を行う。次にグラウンドのシート上でスタッフ・学生の指導を受け竹の箸と椀を作る。公会堂台所では大鍋で素麺を茹で、葉味・麵つゆを用意し車で館に運ぶ。箸と椀が出来上がると子ども達は竹樋の両側に並び素麺流しが始まる。スタッフが素麺を手洗い場で水洗いし樋から素麺を流す。餅つきと同様に広いグラウンドが有効に機能している。



森林インストラクターの講師を先頭に集落内を徒歩で移動し自然観察を行う



子ども達はグラウンドのシート上で、スタッフや学生の指導を受けながら竹の箸と椀を作る

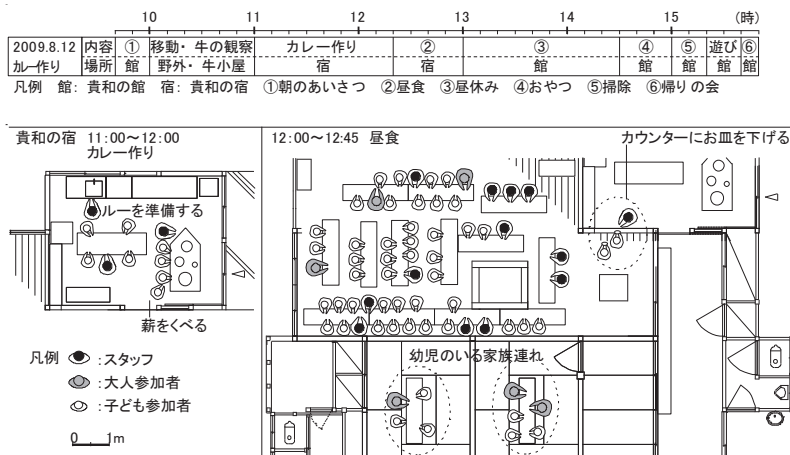


教室に集合し観察した風景の絵と風景画を収める枠を作成する



子ども達は樋両側に並びと、スタッフが素麺を流す

写真3 地域こども塾(2009年素麺流し)



前庭に調理台と大鍋を設置し、具材を切る班と炒める班に分かれ、具材を切った後、大鍋で炒める



スタッフに教わりながら、釜戸で米を炊く



左：スタッフと保護者が長机を板間に配置し、カレーを小鍋に移し台所へ運び配膳準備を行う。子供達は板間へ上がりカレーを受け取り、全員席に座ると食事を始める。

図 8 地域子ども塾 (2009年カレー作り)

### 5.3 館・宿を利用する場合 (2010~2011年)

貴和の宿竣工後の利用方法である。食事会場が宿に移行し、昼食が提供されるとともに、調理体験を主とする行事が開始された。

カレー作り (2009年8月：参加者75人)の事例を図8に示す。館に集合し挨拶の後宿まで徒歩移動するが、途中牛小屋に寄り牛を見学する。宿に着くと前庭の調理台でスタッフと具材を切った後、具材を大鍋で炒める班と釜戸で米を炊く班に分かれ、作業をする。食事は板間へ上がりカレーを受け取り全員席に座ると食事を始めるが、幼児のいる家族は畳敷きの座敷や次の間で食事する。昼休みの後は館周辺の自然観察が行われた。

以上、自然学習や工作が中心の地域子ども塾は、館の旧教室とグラウンドの空間・設備が活かされた行事である。当初は弁当持参であったが、宿整備後は農家料理の提供が可能となり、さらに行事として釜戸炊飯等の農家体験が追加された。

### 6. 交流行事の内容と使われ方

つどう会設立以降、集落活性化のための先進地視察や外部団体との交流も積極的に取組まれてきた (表1)。交流行事開催場所を図9に示すが、利用施設の組み合わせは以下の3種類に区分される。

#### 6.1 公会堂を利用する場合 (2007~2011年)

総会時の利用方法である。付随行事として講演会・映画鑑賞会等が毎年公会堂で開催される。3施設各々が持つ室面積の中で集会室の面積が最も大きいことと、駐車場が確保できるためである。行事開催中は土間台所で準備された飲み物が提供され、8畳和室が講師控室として利用される。

#### 6.2 宿・館を利用する場合 (2010~2011年)

2010年からは県内外から行政や住民組織の視察を受け入れ、廃校活用先進例として選定されているため、視察時は館のみが利用されている。2011年には市教育委員会から依頼があり、放課後子ども教室を受入れ農作業体験が開催されており、地域子ども塾と同様に、館が集合・解散場所、宿が昼食準備・会場、野外が農作業体験場として利用されている。さらに県職員による集落支援活動対象地にも選定され、耕作放棄地での菜種栽培が開始されたが、宿の整備に伴い団体受け入れの際の昼食提供と食事を通じた交流が可能となった。

#### 6.3 宿を利用する場合 (2009~2011年)

宿竣工後、2009年からグループによる宿泊受け入れを開始した。特

年/月	2007-2008	2009	2010	2011
拠点	2007.06会設立	03貴和の宿竣工	09流し台・風呂設置	01台所ガス設置
公会堂	総会・講演会	総会・映画鑑賞会	総会・映画鑑賞会	総会・講演会
館・宿			全て館のみ使用 視察(長門市) 視察(江津市) 視察(周南市)	館(宿) 館(宿) 館(宿) 館(宿) 放課後子ども 県職員研修 教室 総会後懇親会 講演会
宿(宿泊あり)		宿開所式/懇親会 大学ゼミ合宿	館(宿) 日韓交流 (4泊5日) キムチ作り	宿泊モニター1(1泊2日) 宿泊モニター2(1泊2日) 宿泊モニター3(1泊2日)
凡例	館: 貴和の館 (宿): 貴和の宿 (公): 豊井公会堂 (野): 野外 ●: 主な活動場所 ○: その他活動場所 →: 参加者動線 ---▷: スタッフ動線			

注) 図中数字は行事実施年度を示す。

図 9 交流行事の内容と利用施設



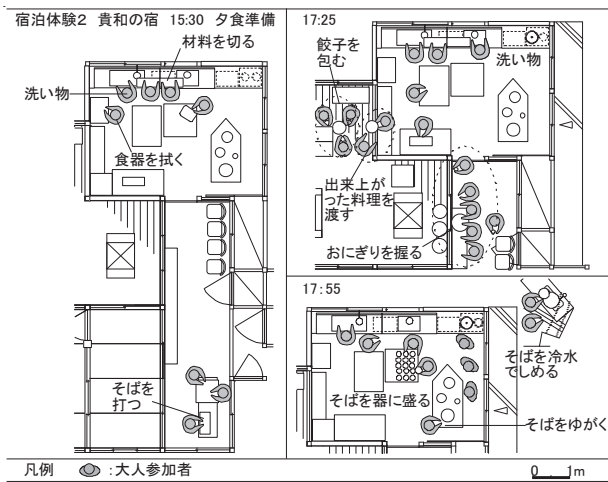
事前に韓国産の種を蒔き、 庭で韓国の講師の指導を受けながらキムチ作りの実習 夜は板間で懇親会を開催、 囲炉裏を囲んで交流

写真 4 キムチづくり (2010年12月)

に風呂増築の2010年は日韓交流開催場所として利用され、韓国農村で地域おこしに取組む団体と住民を招き4泊5日の日程で行われた (2010年12月)。講習会には女性会員を中心に54名 (地元21名、県内団体22名、韓国11名) が参加し、韓国の講師の指導を受けキムチ作りの実習が行われた。夜には宿板間の囲炉裏を囲み韓国音楽の演奏を含め交流が繰り広げられた (写真4)。滞在期間中は女性会員により朝食・夕食等の世話をし、日本の農家民宿を体験してもらう行事もなった。その後講習に参加した住民を中心に手づくりキムチが商品化され、町内道の駅等で販売され特産品化されている。

2011年からは本格的に宿泊体験に取り組むため、モニター事業が実施された。事例を図10に示す。宿泊体験1は7名参加し内2名が宿泊した。宿に到着すると五右衛門風呂の火をおこし、台所でスタッフが指導し参加者4名が蕎麦打ちを体験し、同時に2名が夕食準備を行う。夕食後入浴を済ませ東側6畳間に布団を敷き就寝する。宿泊体験2は19名参加し、土間で蕎麦を打ち台所で夕食準備を始めるが、人数が多いため板間も使用し準備が行われた。囲炉裏





宿泊体験1(蕎麦打ち) 宿泊体験2(蕎麦打ち) 宿泊体験2(夕食調理)

図10 宿泊体験(2011年10月)

の側に長机を配置して食事をし、入浴は交代で行い、板間に5組、6畳続間に8組布団を敷き就寝しており、多人数宿泊にも対応可能なことが確認された。

これら交流行事は、年間行事と地域子ども塾の継続的な取り組みと農家滞在・体験といったプログラム展開の成果として位置づけられ、特に2009年以降は宿の竣工・風呂増築により食事や宿泊を伴う受け入れ環境が整ったことが、視察や団体受入れ等外部団体との交流を行うプログラムの展開につながったものと考えられる。

## 7. 結論

本論では、廃校と空き家を活用した施設整備プロセスが都市農村交流プログラムの展開をもたらした効果について検討した。得られた知見は以下の通りである。

- 1) 廃校を活用した「貴和の館」は、年間行事と地域子ども塾の主な開催場所で、グラウンドは餅つきや素麺流しなどの広い屋外空間を必要とする行事に、教室は加工体験や工作の空間として、100人規模の参加者にも対応可能である。
- 2) 農家住宅を活用した「貴和の宿」の整備により、調理と食事の場が同一施設となったことで、準備・片づけの負担が軽減されたことに加え、農家料理が提供されるようになり、さらに地域子ども塾では農家体験、交流行事では宿泊体験の行事が追加された。
- 3) 館と宿は徒歩5分程度で移動可能な至近距離に整備されたことが、両施設間の機能分担を可能とした条件として指摘される。こうした既存施設の一体的活用により、館には調理設備がないため宿で調理する等、廃校を改修することなく空間機能の相互補完が可能となっている。

以上より、廃校と空き農家住宅を併用した都市農村交流施設整備手法がプログラム展開に与えた効果として、①異なる空間構成を活かしたプログラムを企画することで、プログラムの多様化が実現している、②調理と食事の場の一体化により、農家料理の提供が開始

されている、③廃校から集落内への移動が誘発され、交流圏の拡大につながっている点が評価される。都市農村交流活動を継続実施していくためには、都市からの新規参加を促す仕組みも必要だが、リピーター<sup>注3)</sup>を獲得することが重要であると考えられる。その上では、参加者を飽きさせない企画運営が有効で、地域資源である廃校と空き家を併用した施設整備手法は、プログラムの多様化を実現させ、結果的に持続的な活動運営及び新たな交流の展開(交流行事等)を可能とすることが示された。尚、施設整備によるスタッフの作業負担軽減効果及び交流事業の展開による地域住民の地域づくりに対する参加意識の変化等の分析については今後の課題としたい。

## 謝辞

本研究を遂行するに当たり、「貴和の里につどう会」の吉村利道会長、岡本雅事務局長始め会員の方々には長期に亘り多大な支援と協力を頂いた。研究室の学生諸氏には現地調査と資料整理の協力を得た。また査読者からは丁寧かつ有意義なご意見をいただいた。末尾ながら記して謝意を表します。尚、本研究は日本学術振興会科学研究費補助金(22560613)の助成を受けたものである。

## 注

- 1) 2002-2010年に廃校となった山口県内の小中学校57校に対するアンケート調査結果(2010年11-12月に著者らが実施)によれば、回答の得られた53校のうち、活用されている廃校は33校(62.3%)で、都市農村交流等を目的とした体験交流施設として活用されている5校のうち4校は住民組織が運営主体である。詳細は参考文献1)を参照されたい。
- 2) 著者らがヒアリングを実施(2010年12月)した旧天尾小学校(岩国市・1953年築)は、住民組織により体験交流施設として活用され、助成金20万円を利用し軽微な改修が行われているが、調理設備未整備のため、集落外の施設で実施されており、校舎の老朽化が課題として指摘された。
- 3) 筍掘り(2010.4)の際に実施した参加者アンケート調査(配布・回収数25)によれば、参加回数は初めてが11(44.0%)と2回以上10(40.0%)でリピーターも多い。

## 参考文献

- 1) 山本幸子、中園真人、清水聡士：廃校となった公立小中学校施設の運用状況—山口県における廃校施設の調査報告—、日本建築学会技術報告集、第18巻、第38号、pp.357-360、2012.2
- 2) 黒沼剛、志村秀明：住民の活動と意識変化に着目した協働型集落支援活動の効果に関する研究、日本建築学会計画系論文集、No.669、pp.2109-2116、2011.11
- 3) 金斗煥：過疎地域におけるNPO活動の展開と住民参加に着目した実践的地域運営方法、日本建築学会計画系論文集、No.675、pp.1043-1052、2012.5
- 4) 跡部高幸他3名：小規模漁村における地域運営のパートナーシップ形成のプロセス、日本建築学会計画系論文集、No.667、pp.1601-1609、2011.9
- 5) 酒井俊之他6名：中山間地域における都市農村交流事業の創出方法に関する研究、日本建築学会技術報告集、第24号、pp.355-359、2006.12
- 6) 林賢一他3名：中山間市町村における都市・農村交流と関連施設整備の実態、日本建築学会計画系論文集、No.527、pp.163-167、2000.1
- 7) 山本幸子、中園真人、鶴心治：地元住民団体による茅葺民家の再生、日本建築学会技術報告集、第24号、pp.349-354、2006.12
- 8) 翠勇樹：生活体験施設の設立と地域活性化の可能性、日本建築学会大会学術講演梗概集、E-2分冊、pp.563-564、2010.9
- 9) 米澤和泉他3名：地元学生の主体的活動による地域活性化の可能性、日本建築学会大会学術講演梗概集、E-2分冊、pp.475-476、2007.8
- 10) 秦秀宗他3名：山村地域における廃校活用と都市農村交流、日本建築学会学術講演梗概集、E-2分冊、pp.493-494、2000.7
- 11) 山本幸子、中園真人他2名：中山間集落における空き家を活用した都市農村交流施設の整備プロセス、日本建築学会計画系論文集、No.676、pp.1423-1430、2012.6

[2014年2月19日原稿受理 2014年7月19日採用決定]